北神戸キリスト教会朝拝
マルコ 4 章 35－41 節
「嵐を制する御方」

2023 年 7 月 16 日（日）

袴田清子

35 節：その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。
36 節：そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。
37 節：激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。
38 節：しかし、イエスは艫（とも）の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。
39 節：イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。
40 節：イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」
41 節：弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

序論

私達の人生には、自分の魂を揺り動かし、神様に叫ばざるを得ないような危機的出来事が起こることがあります。その危機の中で、私達は必死に神様に祈る自分を発見するでしょう。もちろん危機の時に、自分の罪深さに気付かされることもあるかも知れません。

しかし、そのような神様との祈りの交わりは、私達と神様との関係をより真実で、深いものに成長させる機会となります。そして、神様が私達の祈りに応えてくださる経験をすることは、私達に生ける神様に益々信頼するように、そして、従うように導くのではないでしょうか。今日の箇所も、弟子達にとって、そのような強烈な印象を残す体験だったように思います。

この記事は、マタイによる福音書にもルカによる福音書にも並行箇所があります。しかし、特にマルコにおいては、個人的にそのことを経験した人による、痕跡があると言われています。日や時間帯が記されていること、**ほかの舟も一緒であった**と不必要な記述がなされていること、**舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった**と、鮮明で細かな描写があること、イエス様の舟の中での正確な位置が記されていること、そして、弟子達の憤りと恐怖の叫びに含まれている荒々しさと非難が生々しいこと、さらには、嵐が鎮められた後の弟子達の大きな恐れと当惑が描写されていること等は、明らかに、実際にこれを経験した人の目撃証言を示唆している、と考えられています。

ガリラヤ湖

ガリラヤ湖は嵐で有名だそうです。ガリラヤ湖は、高い山に囲まれ、水盤のような形をしています。南西からの激しい風が、南方の裂け目から入って来るのですが、圧縮された風が、急に広々

とした湖の上に吹き出ることになるので、恐ろしい勢いで吹き荒らし、突然激しい嵐が起きるのだと説明されています。

その日

マルコによる福音書ではわざわざ、**その日の夕方になって**と記されています。この言葉によって、この嵐の出来事が、主イエスが4章に記されている種まきに関する一連の教えを教えられた「その日の夕方」であるように記されています。つまり、4 章の前の部分と連続しているように記されているのです。

4 章以前の 3 章において既に、主イエスは悪霊追出しと病人を癒されたことによって、有名になっておられ、おびただしい群衆に囲まれておられます。そのため、押しつぶされないように、舟を用意して欲しいと言われたことが3章9節に書かれています。そして、4 章 1 節においても、おびただしい群衆が集まって来たので、主イエスは舟に乗って腰を下ろして教えられたと記されています。つまり、舟に乗って種をまく人の譬えやそのことについての説明とそれに続く一連の教えをなさったように記されているのです。

そして、**その日の夕方になって**、つまり、一連の教えを為さり終えてから、**「向こう岸に渡ろう」**と言って弟子達を湖に導き出されたというように書かれているということです。

そのまま

主が**向こう岸に渡ろう**と、言われましたので、**弟子たちは群衆を後に残し**て、**漕ぎ出し**ます。36節には、「**イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した**」とありますが、殆どの英訳聖書においては*イエスをそのままの状態で漕ぎ出した*と読んでいます。つまり、just as he was あるいは even as he was と訳しているのです。「そのまま」を舟についてのことと理解するのではなく、主イエスに対することとして理解しているのです。主イエスをそのままの状態で漕ぎ出したと、理解するなら、次のようなことが想定できるのです。20 世紀のイギリスの説教者 John Daniel Jones 師は、Devotional Commentary において、次のように記しています。

私達はともかく想像力を働かせる必要がある。その短い節に悲哀の世界をまるごと見ることができるかも知れない。「そのままで」すなわち、湖を渡る寒い旅かも知れないのに、もう一枚上着をお着せするために立ち止まることもせず、食物や飲み物で元気を回復させるため給仕することもせず。彼らは主を「そのままで」、舟に乗せたのである。すなわち、やつれて、すり減って、力なく、使い果たされた状態で。そして、一度舟に乗ると、人間の本来の要求が現われた。

このように人間としての主イエスの姿に迫った解説は、私の心をとらえました。特に、身体的に疲労困憊していた私には、心に響くものがありました。「主も疲れられたのか。」そのように考えただけで、涙が出てきました。それは、他でもない、主イエスが自分自身の通っている現実を、身を以て御存知であるということを覚えて、慰めを感じたからです。

そうです、この日、主は長時間に亘って、多くの人々を相手に、教え続けられていたのです。その日夕方になって、仕事が終わり、弟子達とだけになられた時、主イエスは、ほっとして疲れ切って眠られたとしても不思ではありません。

主イエスの疲れは、しかし、私達の疲れとは異なっていたでしょう。先ほど引用しました、Jones 師は、主イエスの疲れは、身体的なものだけではなかったと指摘しておられました。主は常に深い憐れみと情熱で人々に向き合い、心を注がれました。そこから来る疲れがあったのだと。また、人々の不信仰に対する失望から来る疲れや、御自身に対する尽きない懇願に応えられることによる消耗があったかも知れないのです。霊的な疲れ、精神的な疲れ、心理的疲れがあったと想像できます。そして、それらの全ての疲れは、私達に仕えられたことから来る、神の御子の疲れなのです。

疲れの意味

神から遣わされた救い主であられる主イエスは、地上の人生の間、ずっと私達の重荷を負い、病を負い、悪の力と向かい合い闘って、最後に私達を悪と罪の支配から完全に救うために、御自身の身を十字架に献げ、贖いのための供え物として、命を献げて、死んでくださったのです。私達はこの主イエスによって、罪が完全に償われ、主イエスの完全な歩みによって、全く罪を犯して来なかった者として、受け入れられ、天から新しい命を与えられ、そして、やがて、新しい復活の身体を与えられ、永遠に主と共に居るように、救われているのです。

「この大祭司（主イエス）は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練にあわれたのです。だから、憐みを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けを頂くために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。（ヘブライ人への手紙 4 章 15－16 節）」このように記されている通りです。

海

ところで、主が深い眠りの中におられた時に、この嵐はおきました。通常の航海では 1 時間半もすれば、向こう岸に着くはずです。しかし、**激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほど**になったのです。このような嵐にも関わらず主は眠り続けられ、弟子達にとっては命に係わるような問題が発生しました。

この問題の本質を理解するために、「湖」という言葉に少し注目したいと思います。ガリラヤ湖を現わす「湖」には、ギリシャ語の「海」サラッサという単語が用いられています。当時「海」を悪霊や悪魔の領域として捉える考え方がありました。黙示録 13 章でも、「海」から神を冒涜する獣が立ち上がって来たことが記されています。大嵐によって荒れ狂う海は、正しく悪魔的な力、人間を死へと追いやる力として恐れられたとしてもおかしくありません。人間の命も舟も飲み込んでしまうような激しい嵐は、神の造られた素晴らしい被造物としての自然を超えた、神に反抗する悪の脅威、そして死を思わせたのです。

しかし、この嵐を制する主の御姿は、主イエスこそがその自然界を治められる御方であることを示しているのです。

そして、実際この奇跡に続く 5 章においては、2 千匹ほどの豚を殺すほどの悪霊の力に支配されていた人を癒され、12 年もの長い間病に苦しめられて来た女性を癒され、更には、死んでしまったヤイロの娘を、生き返えらせるという形で、死をも支配なさる御方としての、主イエスの御姿が連続して記されていきます。主イエスは、悪霊、自然界、病、死を

制する御方なのです。

主に対する非難

しかし、嵐が激しく、命の危険にさらされている時に、私達は主イエスが共におられるにも関わらず、冷静ではいられない者です。

この嵐の激しさは、経験を積んだ漁師たちでさえ、恐怖に駆られて、無作法に主イエスを起していることからも想像できます。**「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか。」**このように弟子達は叫びます。この叫びには鋭い非難と嘆願の思いが混じっているように思えます。実は、この箇所は原文では「*私達が滅びてもかまわないのですか*」となっているところで、「*滅びる*」という言葉が使われているのです。自分達の命に係わるような大きな問題に直面する時、私達も、往々にして「滅びるのではないか」という思いになってしまいます。主の御心は、信じる者が一人も「滅びない」というのが分かっているのに、「*私達が、滅びてもかまわないのですか*」と、神様を責め立てるような言葉を祈ることがあるのです。

弟子達はまさしく、生死を左右するように思える危機の中で、自分達の大変さにも関わらず、眠り込んでおられた主への、怒りと非難のこもった*助けてください*という叫びを上げています。しかし、そのような無礼とも言える叫びに対してさえ、主は起き上がって対処して下さるのです。

言で自然界を制する

主は、風を叱り付け、湖に、**『黙れ。静まれ』**と命令されました。すると、突然風はやみ、すっかり凪になったと記されています。ここで、主イエスが風と湖を叱られた言葉は、二つです。**「黙れ」**と**「静まれ」**です。その二つの命令のうち、後半の「静まれ」と訳されている言葉は特徴的な言葉です。これは、動物に噛まれないように轡（くつわ）をはめるという言葉なのです。そして、それは悪霊を黙らせる時に主が用いられた言葉でもあるのです。マルコによる福音書 1 章 25 節で、主イエスはカファルナウムの会堂で教えを開始されました。その時、汚れた霊に取りつかれている男が「我々を滅ぼしに来たのか、正体は分かっている、神の聖者だ」と言った時に、悪霊を黙らせる時に用いられたと同じ「轡を掛ける」という意味の単語なのです。主は、悪魔の力を制された時に用いられた言葉と同じ言葉を用いて、悪魔的力を発揮している嵐に対して「轡（くつわ）をはめられよ」とお命じになったのです。

聖書においては、自然界を制することができるのは、神様だけであると記されています。ですので、この嵐を制する主イエスの物語は、正しく、主イエスが神御自身であるということを語っているのです。

主イエスのこの短い、しかし、権威ある御言葉よって、**風はやみ、**突然完全な静寂が訪れました。

恐れた

この事を経験した弟子たちは、**非常に恐れた**と 41 節に記されています。その恐れは、神の力と御言葉の権威を直に体験したことから生じた恐れです。それまで、自然の脅威に恐れを抱き、自分の命の事で無我夢中であったのですが、主イエスが自然界をも制される奇

跡に直面して、大きな恐れを恐れた」と「恐れ」と言う言葉が二回使われて強調されています。この経験は、弟子達の心に主イエスに関する深い印象を残しました。

信仰を求められる主

主イエスは弟子達に**「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」**と言われました。主イエスにしてみれば、何度も悪霊追出しや、癒しの奇跡を見て来たのだから、御自身を信じて当然だと感じておられたのでしょう。しかし、弟子達はまだ、主イエスがそのような権威ある神御自身であると信じきれていなかったのです。しかし、彼らは自分達の命の危機に際して、身を持って、実際に、主イエスの力と権威を体験しました。しかし、彼らの口から出た言葉は、**いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか**でした。

イエスは誰なのか

「このお方は、いったいどなたなのだろう？」という問に対する答えは、やがて、6 章において、同じような設定の嵐の中、湖の上を歩いて来られた主イエスの口からはっきりと啓示されます。すなわち、主イエスの事を幽霊だと思って、大声で叫んでいる弟子達に対して言われた「**わたしだ。**」という言葉です。この「**わたしだ**」は「***エゴ・エイミ***」です。これは、旧約聖書でモーセが召命を受けた時に、自分を使わされる御方の名を、いったい何と答えたらよいか尋ねた時に、神様御自身が啓示された神様の御名、**ヤハウェ**の 70 人訳のギリシャ語訳であります。旧約時代、神の聖なる御名を発することを畏れて、発音の仕方さえ分からなくなったという、今では、**ヤハウェ**と発音されている神様の聖なる御名です。

主イエスはヨハネによる福音書で、この**ヤハウェ**に当たるギリシャ語の***エゴ・エイミ***を用いて、「わたしは羊の門である」や、「わたしは命のパンである」や「わたしは真理であり、道であり、命である」と御自身のことを啓示しておられます。

正しく、主イエスは、ヤハウェ、旧約聖書で啓示されている「聖なる神御自身」と等しいのです。マルコによる福音書は、主イエスが「**神の子**」であるということを、冒頭において、啓示しています。「**神の子**イエス・キリストの福音の初め」という言葉です。そして、6章において、「**エゴ・エイミ**」という言い方によって**ヤハウェ**と等しいと告白されます。主イエスが神の子であるという告白は、8 章でペトロによって主イエスへの信仰として告白され、15 章の主イエスの十字架での死に際して、更に、異邦人の百人隊長によって「本当に、この人は**神の子**だった」と告白され続けるのです。そして、私達も、主イエスこそ、私達の唯一の救い主、神の御子であると告白するのです。

結論

主イエスは、あらゆる領域において、至高の支配を行使なさる、神御自身なのです。この嵐を制する奇跡物語は、主イエスが旧約のヤハウェと同じ神御自身であることを、自ら明らかに示された出来事です。

そして、主イエスが御自身の真の力を、弟子達の命の危機に際して顕されたことは、私達も、主イエスはそうして下さるし、主イエスに助けを期待するべきだと教えているのです。

今日、様々な世界大の問題と危機を抱える時代において、私達は再び、真の生ける御神

様、世界の至高の支配者に信仰の目を向けましょう。主イエスは、世の終わりの時に、御自身の御国を完成されることを私達は知っています。主イエス・を通して父なる神様の愛を確信し、神の御子、主イエスの流された血潮の故に、ただで与えられる、罪の完全な赦しと、新しく与えられる神様からの命と、御国の完成に期待しつつ、今この時をしっかりと歩んで行きたいと思います。主イエスは、私達の弱さに同情出来ない御方ではなく、むしろ私達の危機の時に、速やかに助けと静けさをもたらし、永遠の祝福を確かに示して下さるのです。共に、感謝して祈りましょう。

祈り

私達の救い主、主イエス・キリスト、主を遣わして下さった御父なる神様、私達の信仰を助けてくださる聖霊なる御神様、聖なる尊い永遠の御名をほめたたえます。

今日、御言葉を通して、救い主、主イエスが、父なる神様と等しく、悪魔の力も、自然界も病も死も支配される御方であることを御言葉から学びました。また、主イエスが私達のために成し遂げてくださった十字架の救いの御業が、完全に私達に赦しと新しい命をもたらすものであるということも確認させて下さり、心から感謝致します。主イエスは、私達の人生の危機の時に、私達の叫びに応えて御自身の栄光を顕し、私達を助け、励まして下さる御方であることも学びました。このような御方が、私達の救い主にして、神様であられることを心から感謝を致します。

様々な問題に満ちた時代のただ中において、私達が信仰を抱いて生きて行くことができるように、御言葉と御霊の御助けを更に豊かに御加えください。今週もそれぞれの持ち場で、あなたを仰ぎ信じ歩みます。私達を御自身の御霊で、豊かに祝福して御導きください。救い主、主イエス・キリストの尊い御名を通して祈ります。アーメン。